

献 辞

十年前に大学院設置要員として本学への御来任をお願いするべく、東京大学を停年御退官の先生を藤沢のお宅に、古岩井教授とお訪ねしたのであるが、ついこの間のようなことの気がする。

先生については、市河三喜賞を授与された『構造的意味論—日英両語対照研究』（三省堂1967）や『意味の諸相』（三省堂1970）等ですでに存じ上げていたが、親しくお目にかかったのは、横浜「言語と人間」研究会の春季セミナー（函南、フェリスセミナーハウス）で講演をして頂いた時であった。

先生は、故服部四郎博士の高弟で、博士の意義素論を継承発展され、その方法論は日英語の比較対照研究が中核となっている。1970年にハワイ大のEast-West Center、更に1974年から一年間フルブライト上級研究員としてCornell 大で日米比較言語行動研究を進められた。博士論文を発展させた『意味論の方法』（大修館書店）で、独自の意味分析の手順と方法論を展開しておられるが、日本言語学会会長就任講演に加筆された「認知と言語表現」『言語研究88』で、認知意味論という新しい分野に挑戦されている。最近では、数カ国語の対照研究の研究会を主催されたり、益々研究に熱を入れておられる。

小生が言語研究センター所長をしていた頃も、委員として貴重な御意見を下さったり、研究発表会で御研究の一端を伺うことも出来た。最近刊書の『理想の国語辞典』（大修館書店、1997）では、日英対照研究、意味の認知的分析等を展開されていて、先生の今までの御研究の集大成といえようが、「あとがき」で問題点を挙げるなど、常に旺盛な探究心を持ち続けておられ敬服の至りである。本学を退かれても東京言語研究所等で今後も活躍される。

本学に在職中は外国語学部大学院研究科初代委員長や図書館長を歴任され、本学の発展に大きな貢献をなされた。学生に対して学問的な面でかなり厳しかったが、ご自分に対しても厳しく、実に几帳面で、部会や教授会等には始まる前に着席されていた。

個人的にはとても人当りの柔らかい、ユーモアに溢れた方であった。菌に衣着せず、はっきり物を言われる方でもあった。時々、先生と意見が食い違い、失礼な物言いでお気に障ったのではないかと反省している。この場を借りてお詫びしたい。

御研究の一層のご発展と御健勝を祈って止まない。

外国語学部教授 伊藤克敏